

中間試験は鋭意採点中

後半の主な内容は積分だが、

今日は 幕間 (**intermission**)

その前にちょっと補足

中間試験は鋭意採点中

後半の主な内容は積分だが、

今日は 幕間 (**intermission**)

その前にちょっと補足

Taylor 展開の問題点 (考えなくてはならないこと)

- 級数が収束するか？
- 収束したら元の関数と一致するか？
- 誤差の理論的評価は？
- 項別微積分 (極限操作の順序交換) を
行なってよいか？

形式的 Taylor 展開が収束しても、

元の関数と一致しない例

$$f(x) = \begin{cases} 0 & (x \leq 0) \\ e^{-\frac{1}{x}} & (x > 0) \end{cases}$$

実は、 $f^{(n)}(0) = 0$ ($n = 0, 1, 2, \dots$)

従って、形式的 Taylor 展開は 0

しかし勿論 $x > 0$ では $f(x) \neq 0$

形式的 Taylor 展開が収束しても、

元の関数と一致しない例

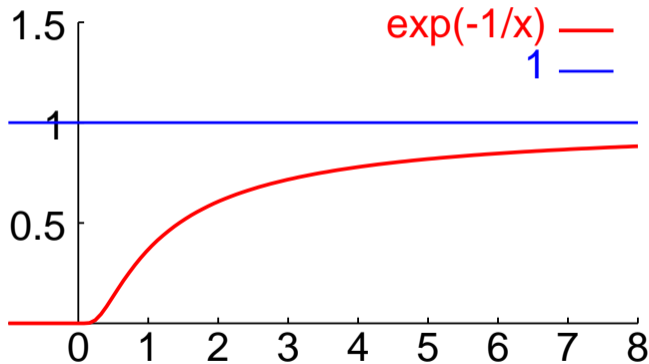
$$f(x) = \begin{cases} 0 & (x \leq 0) \\ e^{-\frac{1}{x}} & (x > 0) \end{cases}$$

実は、 $f^{(n)}(0) = 0$ ($n = 0, 1, 2, \dots$)

従って、形式的 Taylor 展開は 0

しかし勿論 $x > 0$ では $f(x) \neq 0$

形式的 Taylor 展開が収束しても、
元の関数と一致しない例



さてさて、幕間のお話

何処に辿り着くやら、お楽しみ

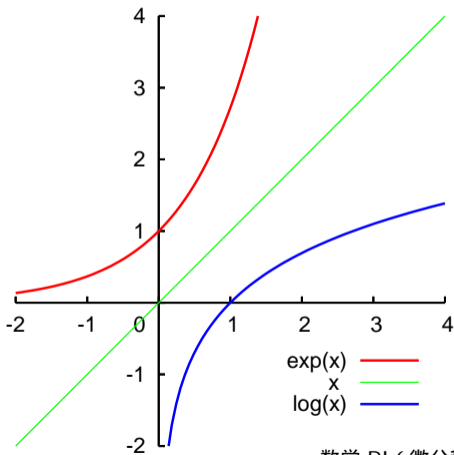
指数関数・対数関数は互いに逆関数

$$y = \exp x \iff x = \log y$$

$$\log(\exp x) = x$$

$$\exp(\log x) = x$$

指数関数・対数関数は互いに逆関数



指数関数：

$y = \exp x$ は微分方程式

$$\frac{dy}{dx} = y$$

を満たす。

対数関数：

$y = \log x$ は積分表示

$$y = \int_{t=1}^x \frac{dt}{t}$$

を持つ。

→ 実はこれは表裏一体

指数関数：

$y = \exp x$ は微分方程式

$$\frac{dy}{dx} = y$$

を満たす。

対数関数：

$y = \log x$ は積分表示

$$y = \int_{t=1}^x \frac{dt}{t}$$

を持つ。

→ 実はこれは表裏一体

三角関数 $y = \sin x$ で同様に考えよう

$$\frac{dy}{dx} = \cos x$$

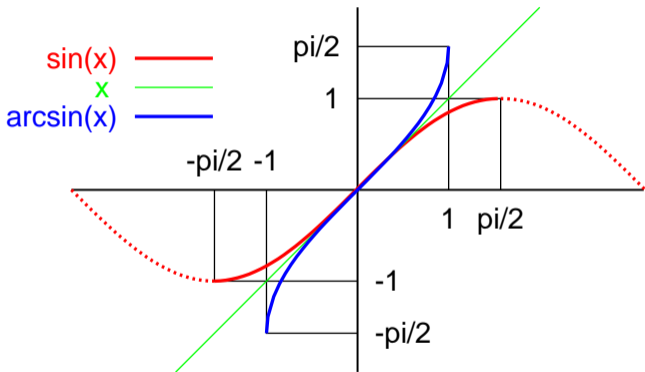
なので、次の微分方程式を満たす：

$$y^2 + \left(\frac{dy}{dx}\right)^2 = 1$$

従って、

$$\frac{dy}{dx} = \sqrt{1 - y^2}$$

$y = \sin x$ の逆関数 $y = \arcsin x$



$y = \arcsin x$ の積分表示

$$\frac{dx}{dy} = \sqrt{1 - x^2}$$

より

$$dy = \frac{dx}{\sqrt{1 - x^2}}$$

従って、

$$y = \int \frac{dx}{\sqrt{1 - x^2}}$$

$y = \arcsin x$ の積分表示

通常 $y = \int \frac{dx}{\sqrt{1-x^2}}$ と書いてしまうが、

変数を変えて正式に書けば、

$$\arcsin x = \int_{t=0}^x \frac{dt}{\sqrt{1-t^2}}$$

ということ。

$x = 0$ のとき $\arcsin 0 = 0$ (即ち $\sin 0 = 0$) だから、

積分の下端は 0 で良い。

$y = \arcsin x$ の積分表示と Taylor 展開

$$\arcsin x = \int_{t=0}^x \frac{dt}{\sqrt{1-t^2}}$$

二項展開して項別積分すると、

$$\begin{aligned}\arcsin x &= \int_{t=0}^x \sum_{n=0}^{\infty} \binom{-\frac{1}{2}}{n} (-t^2)^n dt \\ &= \sum_{n=0}^{\infty} \frac{(-1)^n}{2n+1} \binom{-\frac{1}{2}}{n} x^{2n+1}\end{aligned}$$

$y = \arcsin x$ の積分表示と Taylor 展開

$$\arcsin x = \int_0^x \sum_{n=0}^{\infty} \binom{-\frac{1}{2}}{n} (-t^2)^n dt$$

$$= \sum_{n=0}^{\infty} \frac{(-1)^n}{2n+1} \binom{-\frac{1}{2}}{n} x^{2n+1}$$

$$= x + \frac{1}{6}x^3 + \frac{3}{40}x^5 + \frac{5}{112}x^7 + \dots$$

$(|x| < 1)$

$y = \sin x$ の逆関数 $y = \arcsin x$

- 定義域： $-1 \leq x \leq 1$
- 値域： $-\frac{\pi}{2} \leq y \leq \frac{\pi}{2}$ (主値)
- 積分表示： $\arcsin x = \int_{t=0}^x \frac{dt}{\sqrt{1-t^2}}$
- $(\arcsin x)' = \frac{1}{\sqrt{1-x^2}}$

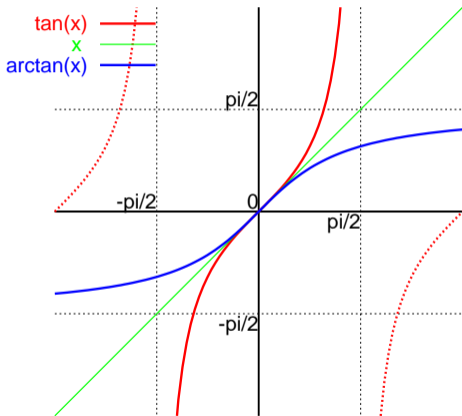
演習問題

\arcsin の時の真似をして、次の手順で

$y = \arctan x$ の **Taylor** 展開を求めよ

- (1) $x = \tan y$ の満たす微分方程式を求める
- (2) $\arctan x$ を積分で表す
- (3) 被積分関数を **Taylor** 展開し項別積分する

$y = \tan x$ の逆関数 $y = \arctan x$



$y = \tan x$ の逆関数 $y = \arctan x$

- 定義域：全実数 x
- 値域： $-\frac{\pi}{2} < y < \frac{\pi}{2}$ (主値)
- 積分表示： $\arctan x = \int_{t=0}^x \frac{dt}{1+t^2}$
- $(\arctan x)' = \frac{1}{1+x^2}$

ところで、 $\arcsin x$, $\arctan x$ とも、
Taylor 展開の収束半径は 1 であった。

$\arcsin x$ は元々定義域が $|x| \leq 1$ なので、
別に不思議はないが、

$\arctan x$ は全実数に対して定義できて、
一見 $|x| < 1$ に限る理由がないし、

被積分関数 $\frac{1}{1+t^2}$ にも別に変な所はない。

ところで、 $\arcsin x$, $\arctan x$ とも、
Taylor 展開の収束半径は 1 であった。

$\arcsin x$ は元々定義域が $|x| \leq 1$ なので、
別に不思議はないが、

$\arctan x$ は全実数に対して定義できて、
一見 $|x| < 1$ に限る理由がないし、

被積分関数 $\frac{1}{1+t^2}$ にも別に変な所はない。

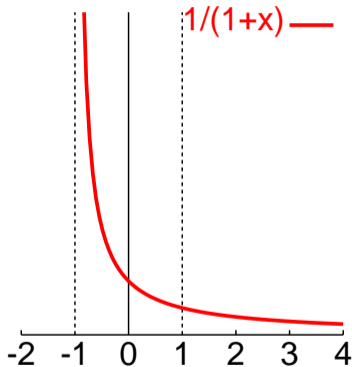
ところで、 $\arcsin x$, $\arctan x$ とも、
Taylor 展開の収束半径は 1 であった。

$\arcsin x$ は元々定義域が $|x| \leq 1$ なので、
別に不思議はないが、

$\arctan x$ は全実数に対して定義できて、
一見 $|x| < 1$ に限る理由がないし、

被積分関数 $\frac{1}{1+t^2}$ にも別に変な所はない。

例： $\frac{1}{1+x} = 1 - x + x^2 - x^3 + \dots$



$x = -1$ で分母が 0 \rightarrow 元々そこまで

実は、複素数まで拡げて考えると、
 $\arctan x$ の正体が顕れる !!

被積分関数 $\frac{1}{1+t^2}$ は $t = \pm i$ で分母が 0 !!

やはり $|x| = 1$ の所に越えられぬ障害があった
($|\pm i| = 1$)

実は、複素数まで拡げて考えると、
 $\arctan x$ の正体が顕れる !!

被積分関数 $\frac{1}{1+t^2}$ は $t = \pm i$ で分母が 0 !!

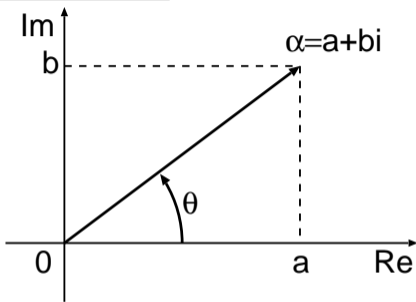
やはり $|x| = 1$ の所に越えられぬ障害があった
($| \pm i | = 1$)

実は、複素数まで拡げて考えると、
 $\arctan x$ の正体が顕れる !!

被積分関数 $\frac{1}{1+t^2}$ は $t = \pm i$ で分母が 0 !!

やはり $|x| = 1$ の所に越えられぬ障害があった
($|\pm i| = 1$)

複素数の絶対値・偏角



- $|\alpha| = \sqrt{\alpha\bar{\alpha}} = \sqrt{a^2 + b^2}$
: α の絶対値 (absolute value)
- $\arg \alpha = \theta$: α の偏角 (argument)
- $\alpha = |\alpha|(\cos \theta + i \sin \theta)$

$$e^x = 1 + x + \frac{x^2}{2!} + \frac{x^3}{3!} + \dots$$

で、 x を複素数にすると、

e^x の方は当面は意味不明だが、

右辺の級数は四則演算と極限操作とだけなので

意味を持つ

x が複素数の場合も、

e^x を右辺の級数で定義してしまおう !!

(\longrightarrow 詳しくは「複素関数論」で)

$$e^x = 1 + x + \frac{x^2}{2!} + \frac{x^3}{3!} + \dots$$

で、 x を複素数にすると、

e^x の方は当面は意味不明だが、

右辺の級数は四則演算と極限操作とだけなので
意味を持つ

x が複素数の場合も、

e^x を右辺の級数で定義してしまおう !!

(→ 詳しくは「複素関数論」で)

$$e^x = 1 + x + \frac{x^2}{2!} + \frac{x^3}{3!} + \dots$$

で、 x を複素数にすると、

e^x の方は当面は意味不明だが、

右辺の級数は四則演算と極限操作とだけなので

意味を持つ

x が複素数の場合も、

e^x を右辺の級数で定義してしまおう !!

(→ 詳しくは「複素関数論」で)

試しに、

$$\begin{aligned}e^{ix} &= 1 + ix + \frac{(ix)^2}{2!} + \frac{(ix)^3}{3!} + \frac{(ix)^4}{4!} + \dots \\ &= \left(1 - \frac{x^2}{2!} + \frac{x^4}{4!} - \dots\right) \\ &\quad + i \left(x - \frac{x^3}{3!} + \frac{x^5}{5!} - \dots\right) \\ &= \cos x + i \sin x\end{aligned}$$

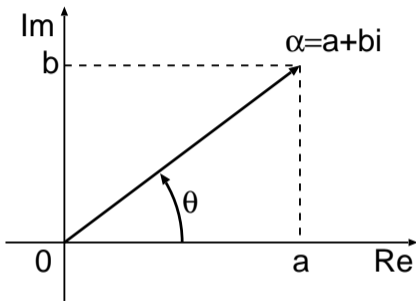
Euler の公式 : $e^{ix} = \cos x + i \sin x$

試しに、

$$\begin{aligned}e^{ix} &= 1 + ix + \frac{(ix)^2}{2!} + \frac{(ix)^3}{3!} + \frac{(ix)^4}{4!} + \dots \\&= \left(1 - \frac{x^2}{2!} + \frac{x^4}{4!} - \dots\right) \\&\quad + i \left(x - \frac{x^3}{3!} + \frac{x^5}{5!} - \dots\right) \\&= \cos x + i \sin x\end{aligned}$$

Euler の公式 : $e^{ix} = \cos x + i \sin x$

複素数の極座標表示



$$\begin{cases} r := |\alpha| \\ \theta := \arg \alpha \end{cases}$$

とおくと、 $\alpha = re^{i\theta}$

: α の極座標表示

三角関数を指数関数で表す

$$e^{ix} = \cos x + i \sin x$$

$$e^{-ix} = \cos x - i \sin x$$

⇓

$$\cos x = \frac{e^{ix} + e^{-ix}}{2}$$

$$\sin x = \frac{e^{ix} - e^{-ix}}{2i}$$

$$\tan x = \frac{e^{ix} - e^{-ix}}{i(e^{ix} + e^{-ix})}$$

三角関数を指数関数で表す

$$\cos x = \frac{e^{ix} + e^{-ix}}{2}$$

$$\sin x = \frac{e^{ix} - e^{-ix}}{2i}$$

$$\tan x = \frac{e^{ix} - e^{-ix}}{i(e^{ix} + e^{-ix})}$$

これを使うと、

三角関数の諸性質は指数関数の性質に帰着 !!

加法定理 ← 指数法則

双曲線関数

$$\cosh x = \frac{e^x + e^{-x}}{2}$$

$$\sinh x = \frac{e^x - e^{-x}}{2}$$

$$\tanh x = \frac{e^x - e^{-x}}{e^x + e^{-x}}$$

- 三角関数と類似の性質を持つ
- 自然現象の記述にも現れる

双曲線関数

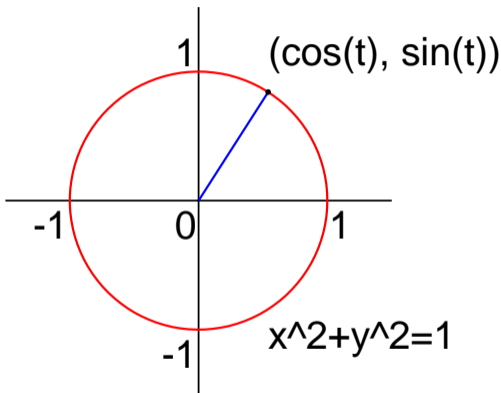
$$\cosh x = \frac{e^x + e^{-x}}{2}$$

$$\sinh x = \frac{e^x - e^{-x}}{2}$$

$$\tanh x = \frac{e^x - e^{-x}}{e^x + e^{-x}}$$

- 三角関数と類似の性質を持つ
- 自然現象の記述にも現れる

$x^2 + y^2 = 1$ の媒介変数表示 $(\cos t, \sin t)$



$x^2 - y^2 = 1$ の媒介変数表示 ($\cosh t, \sinh t$)

